



お空

依はあのかん境を吐  
 露をたつとしとす  
 一か 他くともよるは  
 すとまをすくかあは  
 古ま 種：海海のわか  
 くとくまけい 明  
 大にまらまは 孫 主観  
 カ向とつての無いか  
 ちか のら園子 規一 飯の  
 影 響 者 然し あり こと

有下るも一箱の道具  
 と酒のこを 吟 上戸  
 勝酒のこを 吟 上戸

此風は蕪村より子規等  
 に影響を及ぼす

子規の力は一世に影響を  
 所し、まは此子規等  
 の純客観的傾向に対し  
 量不端をいたすもの  
 に一筆を盡す 芭蕉



の紙客観的修飾に對し  
量、不端をいたすもの  
に之、**茶を煮**—**菘**  
好み臭を去るを以てし  
故にはあつた

さて又作茶の配合を以て  
俗句の如く**茶を煮**は  
大醉—**茶を煮**を成す  
よつて**俗座**は

酒—**茶を煮**を以て  
やうに**茶を煮**を以て  
の**茶を煮**は**俗座**の掟  
とつたものを左に以て

一、**飯**は**三石**の掟を  
す

茶の**花**の掟を  
**茶**の  
茶

一、**汁**—**茶**—**酒**の  
者も一ツに限る掟を以て  
に**精進**の処を以て  
—**茶**は**茶**を  
用ぬる**茶**は**三季**に  
わたり**茶**の物は論  
外あり

茶も**茶**も**茶**も  
茶の**茶**の**茶**

わたり香の物は論  
外あり

まも香もせぬや

三三音同の冬と冬

一酒は腰の前後と

アいて三不血と過(り)

リカキに四たりはくし

村時雨

連衆に酒ぬあそは條

の控に甚た〜し

後了の向の〜し

〜し

狐中、五えと

実お

一、菓子はあるにせぬ

先前を〜と定むし

煎(る)に〜し

雪敷下

一、燈は行燈に〜し

たりぬし

蠟燭は〜し

さむや

右之條々

世有はあり酒をぬ

ア〜厚無〜し

かく〜酒と三不血に限

りしは前や上たる〜作

るものと依句と心得

りしは前中上たるしく作  
るものと依句を心得た  
がために云 **也**有は蘇村  
の一派には無<sup>い</sup>か<sup>ら</sup>も  
後世の俗人皆ふ此風  
ありぬ<sup>る</sup>事ありて女に  
独あや<sup>し</sup>し<sup>る</sup>所々の一  
にも有<sup>ら</sup>ん

一ありに二三かはあり  
物めめす<sup>る</sup>しく<sup>く</sup>片<sup>々</sup>あ  
急の七番の記あるに  
たい<sup>に</sup>た<sup>る</sup>は無<sup>い</sup>か<sup>ら</sup>

大醉<sup>し</sup>出<sup>立</sup>歸<sup>る</sup>

夜丑刻大<sup>に</sup>寝老毛<sup>を</sup>  
不知<sup>己</sup>板間<sup>に</sup>尿<sup>ス</sup>  
今年<sup>五十三</sup>始<sup>メ</sup>  
也

雪<sup>の</sup>回<sup>の</sup>人<sup>は</sup>由<sup>来</sup>酒

考<sup>め</sup>も<sup>の</sup>西<sup>の</sup>海<sup>は</sup>日<sup>星</sup>に<sup>あ</sup>る  
味<sup>に</sup>あ<sup>る</sup>一<sup>は</sup>子<sup>は</sup>酒<sup>に</sup>  
は<sup>あ</sup>る<sup>り</sup>も<sup>味</sup>の<sup>意</sup>像  
せ<sup>る</sup>もの<sup>無</sup>い<sup>か</sup>ら<sup>も</sup>

せしむるもの無いらしむ

花咲や日傘の

かけの野酒まじ

大酒の味言らや

岡古鳥

お付に取も騒ぐま

昔蒲酒

樽のせやい言八百

酒五杯

おまくらや

年かきまよ

くれまいと

あといつもの一茶式の境

地無然とて 敬服に

ありやあまのにはま

少きと<sup>の奉</sup>り病の為あ

ふつと酒を度<sup>か</sup>と

酒くまら

古子ゆた

名解ふか

は一とト

あ

ナ日サ四の

新

身城ま

まを